Osaka University Knowledge Archive

Title	Changes in maternal feelings for children with autism spectrum disorder after childbirth : the impact of knowledge about the disorder
Author(s)	冨山, 更
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72629
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　冨山　更　）	
論文題名	Changes in maternal feelings for children with autism spectrum disorder after childbirth: The impact of knowledge about the disorder（自閉スペクトラム症の子どもをもつ母親の心理変化―知識の自信度が母親の感情変化に与える影響―）

論文内容の要旨

【背景】自閉スペクトラム症（ASD）の子どもをもつ母親は、幼少期の育児において高いストレスと心理的苦痛を経験することが知られている。しかし、診断を受ける前の母親の子どもに対する感情の変化についてはあまり知られていない。本研究の主な目的は、子どもに対する母親の感情の経時的変化を出生時から調査時(5～8歳)まで後方視的に調査することと、ASD児の母親の心理的苦痛に保護的に働くと考えられている因子（ASDに関する知識、ソーシャルサポート、家族資源）と母親の子どもに対する感情との関連について調査することである。

【方法】調査対象者は、ASDの診断を受けた5～8歳の子どもとその母親30組であった。第一に、ASD児の母親の感情の経時的変化を調べるために、子どもの月齢で0、18、36ヶ月時点と調査時点における母親の子どもに対する感情をVisual Analog Scaleにて数値化した。コントロール群として定型発達（TD）児をもつ母親32名の感情の変化を同様に数値化し、比較した。第二に、3つの保護的因子と診断に関連する時点（出生時点、発達に何らかの問題があると気づいた時点、ASDの診断を受けた時点、調査の時点）での母親の子どもに対する感情との関連を調べた。

【結果】子どもの月齢が18ヶ月と36ヶ月時点（診断を受ける前）において、ASD児の母親は、TD児の母親に比べて子どもに対するポジティブな感情が有意に低かった。また、3つの保護因子に関しては、ASDに関する知識の自信度が高いほど、母親は診断時にネガティブな感情を持ちにくいことが明らかとなった。その他の２つの因子は統計的に有意な結果は検出されなかった。

【考察】ASD児の母親は、TD児の母親と比較して、診断を受ける前からすでに子どもに対するポジティブな感情が低下していた。ASD児の母親は医療機関における診断前から高いストレスが蓄積されており、ASD児のみならず親を含む包括的支援が必要であると考えられる。また、医療従事者は診断を告知する際に母親のASDに関する知識の有無などに配慮することが望ましい。さらに母親が事前に発達障害に関する知識を深めることは、診断時期を含み幼少期において、母親の心理的苦痛を緩和している可能性が示唆された。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　冨　山　更　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主査　教授	谷池　雅子
	副査　教授	平野　好幸
	副査　准教授	齋藤　大輔

論文審査の結果の要旨

養育者とその子どもとの社会的相互作用は，幼児期の発達において重要な役割を果たす。 したがって，母親の子どもに対する感情は，子どもの社会的な心の発達にとって非常に重要である。自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorders: ASD）とは社会的コミュニケーションの障害と限局した興味と常同行動を特徴とする発達障害の一つで，虐待や不適応のリスクが高い疾患である。ASDの子どもをもつ母親は，幼少期の育児において高いストレスと心理的苦痛を経験することが知られているが，母親の子どもに対する感情の変化についてや，心理的苦痛に何が保護的に働いているかについてはこれまであまり研究されていない。そこで本研究の目的は，子どもに対する母親の感情の経時的変化を出生時から調査時まで後方視的に調査すること，さらにASD児の母親の心理的苦痛に保護的に働くと考えられている要因（ASDに関する知識，ソーシャルサポート，家族資源）と母親の感情変化との関連を調べることである。研究方法は，5～8歳の言葉の発達に遅れのない高機能ASD児の母親30名と対照群として健常発達（Typically Developed: TD）児の母親32名を対象に，質問紙法と面接法を行った。出生時点，1歳半健診時点，3歳健診時点，調査時点での母親の子どもに対する感情をVisual Analog Scaleによって数値化し，2群間比較を行った。また，ASD児の母親のみに焦点を絞り，診断に関連するイベント毎の時点(出生時点，発達の問題に気づいた時点，診断を受けた時点，調査時点)における子どもに対する感情を数値化し、保護因子（ASDに関する知識の自信度，ソーシャルサポートの開始時期，家族資源のカテゴリー数）と母親の感情変化との関連を調べた。その結果，ASD児の母親は，TD児の母親より1歳半と3歳の時点で顕著に感情の低下がみられた。ASD児の診断時月齢は平均4歳7ヶ月で，医療機関で診断を受ける前からすでに子どもに対してポジティブな感情が顕著に低下していることが示された。また、3つの保護因子に関しては，母親のASDに関する知識の自信度が高いほど，診断時期を含む幼少期において子どもに対するネガティブな感情が低いことが明らかとなった。その他の２つの因子は統計的に有意な結果は検出されなかった。ASD児の母親は、医療機関における診断前から高いストレスが蓄積されており、子どものみならず親を含む包括的な支援が重要である。さらに，母親が事前に発達障害に関する知識を深めることは，診断時期を含み幼少期の子育てにおいて母親の心理的苦痛を緩和している可能性が示唆された。

本論文は、後方視的研究でありいわゆるrecall biasのリスク、診断前の知識がいつどこからどのように得られたのか不明の点、子どもの年齢を焙烙因子に入れた解析がなされていないことなどのlimitationはあるものの，幼少期におけるASD児の母親の子どもに対する感情の変化を明らかにし，診断前の知識が母親の心理的苦痛に保護的に働いている可能性を示唆した初めての論文である。したがって、博士(小児発達学)の学位授与に値すると判断した。